フランス≪百科全書≫における教育項目の意義および性格

——ダランベール，デュマルセ，ならびにルソーの執筆をめぐって——

永　冶　日出雄*

1. 《百科全書》の教育項目と本稿の課題

(1) 《百科全書》の教育項目と従来の評価

フランス啓蒙思想として知られる数多くの著作のなかで，近代の日本ではルソーの《社会契約論》と《エミール》が，際立って世人の関心を集め，特筆すべき社会的影響をもたらしたことは否定できない．そして，こうしたルソーの作品を，十八世紀の啓蒙運動全体のうちに位置づける試みも，たとえば京都大学人文科学研究所による一連の共同研究からも察せられるとおり，さまざまな専門領域の人々をとおし，蓄積を重ね，水準を高めつつある．教育学の分野に限っても，戦後なされたコンドルセやディドロに関する論究，さらにラ　シャロッテやエルヴェシウスについての究明は，《エミール》の意義を把握するためにも，新たな視点を導入したと言いうるであろう．今日ではこれらの研究にもとずいて，啓蒙運動の主流はルソーではなく，ディドロら百科全書派であると認められ，むしろ後者との相違や対立のなかに，ルソーの思想の独自な価値を解明することが，興味深い課題とも感じられる．

ところで，啓蒙思想の集結大成ともいうべき，ディドロ＝ダランベール編《百科全書》(Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des Sciences, des Arts et des Métiers) において，教育に関する項目は，いかなる分量と内容を有し，いかなる企画と陣容によって執筆されたであろうか．近年刊行されたプルーストの労作《ディドロと百科全書》も，教育項目については特別な関心を示さず，その他の代表的な研究書，桑原武夫編《フランス百科全書の研究》やユベール著《百科全書における社会科学》にも，教育理論をめぐる論究は見出されない．内外におけるこれまでの《百科全書》研究のなかで，教育項目への総合的かつ集中的な検討が，軽視され忘却されてきたことは事実である．

* ながや　ひでお　愛知教育大学

しかしながら，こうした問題への関心が，教育の領域に属する著作にも，完全に欠如していたわけではない．従来の多くの教育史書は，《百科全書》全体が果した学芸の普及と国民への啓蒙を指摘するにとどまっているが，最近のシュニデルス[1]やシャルティエ[2]らの書物は，項目《コレージュ》(Collège) あるいは項目《教育》(Education) への言及を含んでいる．また，桑原武夫編《ルソー研究》のなかでは，《エミール》の理論と対比すべく，百科全書派の主張の例証として，項目《教育》の簡単な紹介が試みられている[3]．なお，ルソーに関する研究のなかで，彼が執筆した《政治経済》(Economie politique) の公教育論に論及したものは少くない．

とはいえ，このような現代の研究者と較べても，《百科全書》の教育理論について，より入念に考察し，より詳細に叙述したのはコンペイレであろう．十九世紀に活躍したこのすぐれた教育史家は，高名なビュィソン編《教育学辞典》において，《百科全書》の教育項目に関する論述を担当し，デュマルセ執筆《教育》およびフェゲ執筆《学習》(Etude)に分析と論評を試みた[4]．こうした貴重な考察にもかかわらず，教育項目に対するコンペイレの評価は相当に厳しい．彼の判断によれば，ディドロが編集し，ルソーが協力した出版としては，教育に関連する項目は貧弱に感じられ，デュマルセの立論はとりわけ平板凡庸である，

《教育学辞典》にみられるこのような彼の断定は，教育学者の間における《百科全書》への関心の低さを，打破するよりもむしろ助長したとも考えられる．しかし，《百科全書》の教育項目をより広い範囲から収集し，それらの基本的特徴や歴史的意義を考察するとき，筆者はコンペイレの先駆的な努力に敬意を抱きつつ，彼とは異なった結論へと到達するのである．

(2) 教育項目の概観と本稿の課題

《百科全書》の教育項目というとき，筆者はつぎの三

種を念頭に置いている．すなわち，①ダランベール執筆の《コレージュ》をはじめとして，フェゲ（Faiguet）執筆の《学習》，ルフェーブル（Lefebvre）執筆の《家庭教師》（Gouverneur）など，教育の領域に属する事柄を主題とする項目．②デュマルセ執筆の《経験》（Expérience），ブルジュラ（Bourgelat）執筆の《練習》（Exercice），筆者不明《能力》（Faculté）など，教育と密接な関連を有する項目．③ルソーの執筆《政治経済》を典型とし，ディドロ(Diderot）執筆《ジェズイット》（Jésuite），ジョクール（Jaucourt）執筆の《スパルダ》（Lacédemone）など，他の領域を主題とするが，教育に関する注目すべき叙述を含む項目，等々がそれである．

以上のように教育項目を規定するならば，その分量は相当なものとなる．デュマルセが担当した《教育》には，メジアン（Meyzien）による《士官学校》（Ecole militaire）ほか五つが関係項目として列挙され，また1780年に作成された《百科全書索引》には約五十が《教育》に関連する項目として記されている[5]．しかし，さきに述べた①および②の種類のなかにも，この《索引》に欠落したものが多く，《百科全書》の教育項目の全貌を把握することは至難の業である．教育の問題が政治，道徳，学芸など種々の領域と関連し，また《百科全書》がしばしば意外な題目のなかに，鋭利かつ重要な論述を秘めることからも，とりわけそうした感が深い．

筆者は将来において，《百科全書》の教育項目についてより詳細で網羅的な報告を提出しようと考えているが，本稿では主としてつぎの三つの項目に考察を限定したい．すなわち，《百科全書》刊行の中軸ともいうべきダランベールによって執筆され，かつこの領域のものとしては，社会的にもっとも反響を呼んだ項目《コレージュ》，《百科全書》の教育項目のなかで中心的な位置を占め，執筆者のうち最長老のデュマルセによる《教育》，さらには百科全書派ならぬ《百科全書》への寄稿者ルソーによって書かれ，独自の公教育論を含む項目《政治経済》である．

ところで，こうして《百科全書》を検討するとき，私たちがもっとも留意すべきは，これらの項目が1751年の前後に書かれたとの事実である．啓蒙思想の生んだ有名な教育書，たとえばエルヴェシウスの《精神論》は1758年に，ルソーの《エミール》とラ・シャロッテの《国民教育論》は1762年に，そしてディドロの《大学案》は1783年にはじめて現れた．《百科全書》が刊行された時点は，ルソーやディドロもいわば駆け出しであり，彼らの教育思想についてはとくにそうである．こうした状況を直視しつつ，筆者は本稿の課題をつぎのように設定したい．すなわち，①《百科全書》の教育項目の企画と執筆には，いかなる経緯によって，いかなる人々が参加したか．②《百科全書》の教育項目に認められる歴史的意義と基本的な性格はなにか．とくにいわゆる百科全書派の執筆した項目についてどうか．③《百科全書》刊行の初期において，ルソーはこの事業はどのように関与したか．また当時において，ルソーの教育理論と百科全書派のそれとの間には，どのような類似と相違が存在したか，の三点である．

2. ダランベールと項目《コレージュ》をめぐって

(1) ダランベールと《コレージュ》の執筆

《百科全書》第三巻に掲載された項目《コレージュ》（Collège）は，この事業の推進者のひとり，ダランベール（D'Alembert）の執筆として注目されるばかりでなく，古い勢力の側から激しい非難と攻撃を浴びたことで有名である．こうしたダランベールへの攻撃は，《百科全書》全体とエルヴェシウスの《精神論》を襲った1758年の弾圧の，いわば序曲とも認められる[6]．

そもそも《百科全書》の刊行が始められた1751年の前後には，この企画の中心的な人物はディドロではなく，むしろダランベールであると一般に理解されていた．当時においてダランベールの学問的業績と社会的名声は，同世代のディドロやルソーをはるかに超えており，人々はなによりも《百科全書序説》によって，ダランベールこそこの壮大な事業の枢要に位置すると感じたに相違ない[7]．たとえば，第一巻の内容に関して，数次にわたり論評を試みた《トレヴー誌》は，ジェズイットの立場から数多くの項目を手厳しく批判するとともに，ダランベールの執筆には特別な配慮を示している[8]．

なお，《百科全書》が企画された端緒についても，これまで伝えられたように[9]，出版業者ル・ブルトンがまずディドロに依頼し，ついでディドロがダランベールに協力を求めたのではなく．出版業者からの依頼と契約は，ダランベールに対するものが先行した，との証左も発見された[10]．いずれにしても，事業の完遂にいたるディドロの比類ない勇気と努力に眼を奪われるあまり，離脱する以前のダランベールの役割や貢献を，過小評価し易いことは確かである．

《百科全書》において，このような位置を占めるダランベールが，項目《コレージュ》を執筆するにあたって，並々ならぬ熱意と決意を抱いたことは注目に価する．コンペイレの見方に代表されるごとく，この事業の

中軸を担った人々が，教育の問題を軽視していた，との理解は，項目《コレージュ》に含まれる下記の一節によっても，疑問に付せざるをえない．教育に関するみずからの論述について，毅然たる態度でダランベールは書いている．

「この項目で私は，パリのさまざまなコレージュの歴史を詳細に語るつもりはない．それは《百科全書》の目的からも外れ，国民の関心からも遠い．ここで私たちが検討したいのは，他のきわめて重要な問題，すなわち青少年に授けるべき教育の問題である．（中略）この重要な問題を論ずるに先立って，私は公正な人々につぎのとおり予告したい．これから展開する論述は，心ならずもある種の人達を激怒させるかもしれない，と．彼らのことを私が取り扱うとしても，それは憎んだり，怖れたりするからではない．こうした人達のなかには，私の崇敬する人物もあり，私の敬愛する人物も多い．しかし，以下に指摘する弊害は，彼らを養うため，慣行常道に従って寄進している善男善女の大半（私をも含め）を，怒らせ苦しませている．私が闘いを挑むのは，弊害に対してであって，人間に対してではない．この問題こそ政治や宗教と密接に関連し，だれかれの逆鱗を怖れず，自由に論じうるとき，真に価値あるものとなる[11]．」

こうした教育問題への関心が，《序説》に掲げられた《百科全書》の目的，すなわち学芸の発展と普及を促進し，国民の利益と福祉を増進するとの目的に源泉を有することは明らかである．とはいえ，ダランベールが執筆した《コレージュ》に若き日の学業の回想が含まれることにもまた注意したい．後継者コンドルセが語るように，彼の学んだコレージュは，ジャンセニストの教師や数学の授業に接しうることで異色の学校であった．しかし，こうした新しい息吹きは，なお強固に支配する中世的な重苦しさを，いっそう彼に痛感させたであろう[13]．かつまた，自己の不幸な生いたちや貧しい人々との生活は，民衆の状態や要求を彼に強く意識させていたと思われる．ダランベールは言う．

「不幸にも家庭教育に必要な経費を，捻出できない親もいる．こうした家庭の子どもにこそ，公教育が便宜を与えるように，と結論したい．筆者は若い頃に無駄にした月日を悔恨の気持なしに回顧できない．この取戻しえない喪失は，私の教師の罪ではなく，根強い因習の罪であろう．祖国が筆者の経験を参考とされるよう切望する．」[14]

(2)　項目《コレージュ》の主張と《コレージュ》事件

さて，項目《コレージュ》に論述されたダランベールの主張は，いかなる基本的性格を有するであろうか．まず指摘できるのは，中世的な教育に対する辛辣な批判であって，ラテン語など古典語の偏重やキリスト教の教義の注入に，厳しい判断が下されている．このような批判はすでにルネサンスの時代に，ラブレーやモンテーニュにより提起されているが[15]，《百科全書》の叙述は，公教育の支配権を握るジェズイット教団に，新たな挑戦と受け取られたにちがいない．ダランベールによれば，多くのコレージュは五つの課程，すなわち人文，修辞，哲学，道徳および宗教から成るが，いずれにあっても，教育の状態は憂慮すべき実情なのである．

「人文とはコレージュにおいて，ラテン語で書かれた教えを学習する時期のことである．この時期は約六年を要し，終りにはギリシア語の浅薄きわまる知識を授けられる．かくして古代の初歩的な作家について半可通となり，たどたどしくラテン語で作文することにいたる．（中略）哲学を正しく定義すれば，まさに事物の学習というべきである．しかし，コレージュで行われる哲学は，この定義からなんと隔っていることか．そこでは《哲学大要》から始めるのが普通である．これこそ哲学の概念やアダムの哲学などに関する，無数の無益な寄せ集めにすぎない．」[16]

こうした教育の現状への批判に関連して，筆者は彼の主張を貫く第二の特質として，理性および生活の尊重に注目を促したい．ダランベールがコレージュでのラテン語の偏重やキリスト教の注入を強く非難したのは，なによりもそれらが，青少年に理性の行使を困難ならしめ，現実生活における無為無能へと導くからであった[17]．それゆえ，項目《コレージュ》は合理主義の徹底と現世的幸福の追求という原理に立脚し，啓蒙思想の典型的な論稿とすら評価しうるであろう．ダランベールは続けている．

「つねに祈るがよい，とイエス・キリストの語られたことを口実に，少なからぬ教師たち，とりわけ厳格主義を信奉する人々は，学習の大半の時間が瞑想と教理問答によって過ごされることを望んでいる．まるで自己の職務に課せられた義務を果すべく，精励し労働することが，神を喜ばせる最善の祈りではないかのように．（中略）人生のもっとも貴重な時期と考えるべき十年を，コレージュで過ごした青年は，この年月を無駄なく用いたとしても，一知半解な死語の知識と，修辞の規範や哲学の原理を詰め込まれ，しかもこれらは，卒業するやすぐに忘却放棄される．ときには神への献身について誤まった教理を実践して，品性の腐敗と健康の悪化に陥いった者もいる．」[18]

しからば，ダランベールは公教育に関して，どのような改革を積極的に提案するであろうか．彼はまず，フランス語など近代語の重要さを力説し，科学的思考と市民的教養を培うべく，ルネサンス以降の学芸の習得を奨励するのである．ダランベールは言う．

「英語とかイタリア語，ドイツ語やスペイン語などすぐれた作家の輩出した外国語も，コレージュの教育のなかに採択すべきである．これらの外国語のほとんどは，学者しか用いられない死語よりもはるかに学んで有益であろう．（中略）哲学においても，論理学をほどほどにし，形而上学をロックの概要に，純粋に哲学的な道徳をセネカとエピクロスの著作に，そして宗教的な道徳をイエス キリストの山上の祟訓にとどめるがよい．自然学は実験と幾何学としてよい．幾何学こそ，論理や自然を扱う諸学のなかで，最善のものだからである．なお，こうした，各種の学習に加えて，趣味を涵養し，品性を高尚にするため，美術やとくに音楽を学ばせてほしい．」[19]

さらにまたダランベールは，行政を司どる人々が，学校の改革に留意し，教師の処遇を改善するようにと勧告している．なぜなら，いかなる階層の子弟にも，適切な教育の授けられることが望ましく，国家あるいは社会の責任として，すぐれた教師と施設を用意することが必要である．かくして項目《コレージュ》の主張は，エルヴェシウスやテュルゴに先立って，政治と教育の関連に着目し，近代の公教育を根拠づける基本的な原理を提起したのである．ダランベールは記している．

「これらの慣行や因習の改革に努むべきは，なによりもまず政府である．そのような改革が政府の課題となれば，良識ある市民は学習改善の美事な構想を，続々と提出するであろう．（中略）青少年の教育がなおざりであるとすれば，その責は私たちみずからに存する．すなわち，教育を担う人々を，私たちが尊重しないからである．あの精神の軽薄さ，いまや祖国を支配し，あらゆる事柄に浸透しつつある軽薄さが，こうした状況を生みだした．フランスにおいて尊敬されるのは，自己の職務を立派に遂行する人物ではない．ここでは軽佻浮薄な人物が好まれるのである．」[20]

こうした項目《コレージュ》を含む第三巻は，1753年の11月に公刊された．すでに初巻の現れた時点から，古い勢力はさまざまな文書によって《百科全書》を非難し，そのような攻撃は，執筆者ブラートに対するソルボンヌの迫害や，宮廷の国事会議における発行禁止の決定にまで達していたのである．しかし，ダランベールと項目《コレージュ》に向けられた糾弾は，いわば《百科全書》の中核を狙撃すべく，より執拗で周到なものであった．

項目《コレージュ》への攻撃の火蓋は1754年の10月にリヨンの神父トロマにより切って落された．このジェズイットは，みずからが教授をつとめるコレージュの開講式で，多数の聴衆を前にして，従来の教育方法を弁明し，項目《コレージュ》の主張を非難したのである．憎悪に充ちた彼の演説は，国家と教会による百科全書派への弾圧を勧め，ダランベールに対する個人的な侮辱や中傷にまで及んだと伝えられる．この演説を知ったダランベールは，トロマを王立協会に提訴したが，協会の内部もまた賛否に分裂し，紛争はさらに拡大していった[21]．こうした《コレージュ》事件の経緯は，近年まとめられたグリムズレイの研究によって綿密に追跡されている．しかし，彼の分析によっても，双方の議論は教会の威信やダランベールへの侮辱を問題とすることが多く，そこに提起された教育改革そのものについて，どれほど理論的に論争されたかは明らかでない．

このような紛糾が，のちにルソーとの関係で惹起される《ジュネーヴ》事件とともに，ダランベールの気力を消耗させ，《百科全書》への訣別の一因となったことは，想像に難くない．とはいえ，ダランベールはジェズイットへの批判や公教育に関する提言において，最後までみずからの信念を守り続けたようである．1756年に出版された《百科全書》第六巻のなかで，彼はフェゲ執筆の項目《学習》に異例の後書きを添え，つぎのように断言したのである．

「項目《コレージュ》の執筆者は，この項目を読了して，敢えて言うが，欣快の気持に耐えない．三年前に私の主張したすべての事柄が，青少年の教育に功績ある，尊敬すべき人物の省察および経験をとおし，ここに明確かつ率直な賛同を得たのである．」[22]

3. デュマルセと項目《教育》をめぐって

(1) デュマルセと《百科全書》

《百科全書》の項目《教育》(Education) を執筆したのはデュマルセ (Du Marsais) である[23]．この有名ならざる人物が，教育の領域の中心的な項目を担当したことは，私たちには意外に感じられる．しかし，執筆の依頼が開始された1746年の前後には，彼が有する社会的信頼と教育的業績は，デュドロやルソーのそれを遠く凌いでいた．デュマルセは《百科全書》への寄稿者の間でも，モンテスキューやヴォルテールを上まわり，フォントネルとともにもっとも年長に属する[24]．またダランベールは，第七巻のはじめに彼の逝去を悼んで，長文の讃辞を掲げているが，こうした尊敬と配慮が示されたのは

モンテスキューに対する場合だけである[25]．

デュマルセは1676年にマルセイユで生まれ，オラトワール派の神父から教育を授けられた．25才にしてパリに出た彼はおもに教師としての仕事に生計を求めつつ，生涯にわたって清貧に甘んじたといわれる．デュマルセの初期の作品は宗教問題を取扱い，ジァンセニズムあるいはフォントネルに近い立場から法王至上権論を批判した[25]．やがて彼は言語と文法に関するいくつかの論文を公にし，文法学者として注目される．デュマルセによって提起された新しい理論は，言語の研究や学習において，言葉の自然的発生と人間の認識の発展を考慮することに特色があったらしい．《譬喩論》は彼の代表的な著作であり，ディドロとダランベールもこれを名著として人々に勧めている[26]．

こうして彼は新しい理論をラテン語の習得に適用し，またいくつかの家庭や学校で示した教育の実践によって，経験に富むすぐれた教師としても評価されていた．このようなデュマルセと《百科全書》とのかかわりについては，ダランベールの讃辞を辿ってみよう．

「ボーフルモン一家の教育が終っても，デュマルセは青少年の教育に対する，自己の稀有な才能を休ませはしなかった．彼はサンヴィクトル地区の寄宿学校を引受け，独自の方法で若干の若者を教えたのである．しかし，ここでは予期しない事情のため，途中でやめることに終った．それでもなおデュマルセは，個人教授を続ける気持でいたが，寄る年波が妨げとなった．ついには生きるための僅かな授業に限定し，彼は財産もなく，希望もなく，ほとんど頼るところもなく，ひっそりとした生活に閉じこもっていた．幸運にもデュマルセが，《百科全書》に参加されたのはこの頃であった．彼から寄稿され，第六巻までに収録されている多数の論述は，この事典に鏤められた宝玉であり，いかなる称讃の言葉によっても尽し難い．そこには健全で清澄な哲学，該博で明快な学識，原理の厳密さと応用の適切さが一貫し，彼の執筆した項目を，《百科全書》の最善の箇所に数えて誤りではない．」[27]

《百科全書》におけるデュマルセは，第一巻で列挙された主要な執筆者21人のなかに含まれ，略号(F)として登場する．また，ダランベールは言語関係の項目の企画や担当について，彼の意見と助言を尊重したらしい[28]．デュマルセみずからが寄稿した論述は，1797年に刊行された著作集によれば，《A》(A)から《文法学者》(Grammairien)に至る142項目である．これらの大半は言語あるいは文法に関連するが，本稿の課題にとっては項目《教育》のほか，項目《学級》(Classe)および項目《経験》(Expérience)が注目される[29]．なお，《百科全書》の項目《哲学者》(Philosophe)は，1778年に現れた書物《偏見について》とともに，しばしばデュマルセの作品として論じられたが，ディックマンの周到な究明によって，今日ではいずれも別人の著作と考えられる[30]．

(2)　項目《教育》の基本的性格

項目《教育》は1755年に発行の第五巻に掲載され，フェゲの筆になる項目《学習》とともに，教育に直接かかわる論述としてはもっとも長文に属する．この項目でまずデュマルセは，教育の目的を人々における幸福の追求および社会への寄与に設定する．彼の論述はジェズイットの支配やスコラ的な教育に対して，ダランベールほど熾烈ではないが，新しい教育の提唱にあたって，宗教的な色彩を払拭し，功利主義の原理を貫徹していることをなによりも注目すべきであろう．デュマルセは論じ始める．

「この世に生まれる子どもは，やがて社会を構成し，そのなかで生きていく，したがって，子どもの教育について，つぎの観点から関心を寄せることが大切である．(1)子どもみずからが，社会において有益に活動し，人々から尊敬を受け，かくして自己の幸福を手中にしうるように．(2)家族を扶養し繁栄させうるように，(3)市民にすぐれた教育が授けられることによって，国家もまたこれらの構成員から貢献や恩沢が受け取れるように．」[31]

こうしてデュマルセは各人の幸福と社会での活動を重視し，民衆に教育の機会を与え，子どもの学習を現実生活に結合することを勧告する．たしかに彼の論稿には，項目《コレージュ》とおなじく，現実の政治に対する批判や国家の本質についての究明が稀薄である．しかし，デュマルセが権力者や支配層への期待よりも，国民全体の能力の向上を力説していることは，エルヴェシウスやコンドルセの思想の先駆として，あらためて評価すべきであろう．項目《教育》は続けている．

「国家におけるいかなる階級に属しようとも，適切な教育が必要でない市民は見出し難い．君主の子どもにも，高位高官の子どもにも，農村の子どもにも，教育は必要である．村落にすら宗教的真理を教える学校があるとすれば，彼らがやがてより多くの知識をもって活動しうるため，身体の鍛練や実際的な訓練をとり入れ，将来の職務の義務と徳義を学ばせる学校が設けられてよいのである．」[32]

このような原理から展開されるデュマルセの構想が，教育の内容に関して功利主義，さらには実用主義の色濃いことは否定できない．彼によれば，人々は健康を維持

するため，生理学的な知識を学ぶとともに，生活を向上し便宜ならしめる手段として，早くから自然現象の観察や機械器具の取扱いに習熟するがよい[33]．

さらにまた項目《教育》は，政治の学習と新聞の閲覧を勧め，これらを素材に青少年が質疑し討議することを推奨する．こうしたデュマルセの提言は，卑俗で雑駁であると笑うべきではなく[33]，民衆のうちに自主的判断と主体的行動を育成する配慮と理解したい．彼は言う．

「上級の段階に入ると，青少年にはきわめて有益な勉学が用意される．そこではさまざまな政治形態について学び，新聞の読みかたを覚え，教師すら知らないことを地図や辞典で調べるのである．この種の訓練は，青少年にとって最初は苦手であろう．なぜなら，彼らはまだなにも知らず，これまで頭に入れた事柄といま眼の前にある事柄とが結びつかないからである．けれども，こうした読書は次第に青少年の関心を高めるであろう．同じ事柄を年長の者が問題にし，彼らを激励し称讃する場合にはとくにそうである[34]．」

さて，ラテン語の学習の改善で注目され，すぐれた教育者として定評のあったデュマルセが，指導の方法に関心を有することは当然である．彼は子どもを導くにあたって，発達の段階や個性の相違を慎重に考慮するよう力説し，モンテーニュやロックを源泉とする近代の教育理論の基本原理を強調する．とはいえ，教育の方法に関するデュマルセの主張は，豊かな経験から滲み出た得難い示唆を含むにもかかわらず，やや独創性に貧しく，凡庸であるとのコンペイレの批評を認めざるをえない．ただし，おとなとは価値や生活を質的に異にする「子どもの発見」を試みたルソーを別とすれば，いま述べた特徴は多くの啓蒙思想家に共通である．モンテーニュの教育論を連想させる筆致で，項目《教育》は訴える．

「草木の栽培と子どもの教育は類似するところが大である．いずれにおいても，自然が基礎を提供する．収穫したい作物に土壌が適さないときは，田畑の持主がいくら働いても駄目である．同様に賢明な父親や眼力と経験をもつ教師ならば，一定の期間は生徒を観察し，彼らの傾向・性向・趣味・性格を識別するであろう．かくして，彼らがなにに適し，さらにいうならば，社会のいかなる役割に適するかが認識できる．」[35]

しかしながら，項目《教育》に述べられる学習の理論が，経験主義の認識論を基盤としていることは看過できない．こうした認識論から学習理論への発展について，デュマルセの論述は確かに冗長であり，またビュフィエの大作《諸学教程――第一の真理について》から多くの文章を引いている．とはいえ，ときに指摘されるように項目《教育》は《諸学教程》に単純に依拠するのではなく，両者の間には複雑な関係が存すると筆者は考える．名著と評価したとはいえ，ジェズイットの教典であるビュフィエの著作から，デュマルセが宗教的要素を骨抜きして引用したことなど，なお詳細な検討が必要と思われる[36]　実際にデュマルセの作品《比喩論》や項目《教育》の主張が，むしろロックやコンディヤックとの関係を感じさせることは疑いえない．彼は記している．

「私たちがこの世に現われるとき，話すための器官をもち，支えてくれる人達もいる．しかし，人生の初期には，話すことも歩くこともできない．だが，頭の器官が固まり，生活を始め，初歩的な知識を身につけると，そのときこそ教師の授ける原理や真理が，受入れ易くなる．生徒がこうした事柄に耳を傾けかけると，教師も分ってくれると推察する．けれども，教師の経てきた経験は長く，生徒の生活がまだ端緒にあることを忘れてはならない．」[37]

なお，デュマルセは項目《学級》において，ダランベールとおなじく，私教育に対する公教育の優位を強調していることを付記しておく．

4. ルソーと項目《政治経済》をめぐって

(1) ルソーと項目《政治経済》

ルソー（Rousseau）が《百科全書》に寄稿した項目《政治経済》（Economie politique）は，《社会契約論》を準備した政治論文として重要なばかりでなく，そこに含まれる公教育論によってしばしば注目されてきた[38]．ルソーの公教育論は晩年の《ポーランド統治論》のなかでより詳細に述べられているが，現実の公教育に深い疑いを抱き，私教育の構想を展開した《エミール》との相違が，とくに関心を呼ぶのである．

しかしながら，《百科全書》の計画において，当初にルソーが依頼された分担は，政治の問題を論ずることではなく，音楽に関する多数の項目を執筆することであった．ダランベールによる第一巻の序説は，《学問芸術論》の著者としてルソーの名を挙げ，（S）の記号で音楽項目を担当したことを告げている．こうした《百科全書》への協力において[39]，ルソーはきわめて誠実な寄稿者であったと伝えられる．《告白》の第七篇には下記の回想が見出される．

「このふたりの文筆家（ダランベールとディドロ）は《百科全書》を企画したところだった．（中略）ディドロは今回の企画に，なんらかの形で私が参加することを望み，音楽の部分を依頼した．私は承諾したが，急いで書いたため，きわめて拙いものになった．というのは，

この事業に加わった他の執筆者とおなじく，三カ月の期間しか許されなかったから．だが，この期限を守ったのは私だけであった．」[40]

こうした音楽項目の分担とは別に，いかなる経緯によってルソーが《政治経済》を執筆したかは明らかでない．とはいえ，この項目を担当することはディドロからではなく，ルソーから積極的に提議された．とユベールは推測する[41]．1756年のヴェルヌあて書簡はルソーが《政治経済》の論述にみずから満足したことを示しており[42]，反対にこれへの不満を感じたディドロは，あらためて第十一巻にブーランジェ執筆の《政治経済》(Oeconomie politique) を挿入したとも察せられる．ともあれ，ヴェネチア旅行の経験のあと，ルソーは人間を左右する重大な要因として政治に眼を向け，倫理や人間形成に対する政治のかかわりを考察しはじめたらしい．しばしば引用される《告白》の一節は，こうした認識の発展を簡潔に表現している．

「着手していたさまざまな著作のなかで，私がもっとも長く省察し，もっとも興味深く没頭したもの，そして私の生涯の仕事とするのを望み，私の名声を不動とするように感じられたもの，それは《政治制度論》である．私がこうした考えを抱いたのは，十三年ほど前のこと，ヴェネチアに滞在して，あれほど評判の高い政府にも種々の欠陥を認めたときである．そのあと私は道徳を歴史的に研究し，視野を広くした．すべてが根底では政治に依存していること，またいかなる国民も自分たちの政府に似合わしい性格にしかなりえないと悟ったのである．」[43]

なお，この時期までにルソーは，教育に関する作品として《サント　マリのための教育案》をまとめている．当時のルソーはマブリー家の先生として知られていたが，家庭教師の経験はさらに早く1735年のシャンベリーに始まるという[44]．しかし，項目《政治経済》に開陳された公教育の理論は，そうした教師の経験からではなく，なによりも彼における政治思想の成熟とともに伸長したと考えられる．

(2)　項目《政治経済》と公教育の理論

《百科全書》第五巻でルソーが論じた政治経済とは，家庭経済と相違するのは勿論のこと，たんなる国家財政でもなく，むしろ政府あるいは政治権力を意味している．だからこそ彼は，ここにおける第一の課題として，人民を幸福へと導くのはいかなる政府か，と問うのである．ところでルソーは国家を理解するうえで，ディドロなど百科全書派とは異なった立場に依っている．たとえば，後者が執筆した項目《主権者》(Souverain) のように，百科全書派は個人の欲望や利益を原点と考え，このような利益を増進する手段として社会的結合を位置づける．しかし，ルソーにとっての社会や国家は，たんに功利的な手段ではなく，むしろ倫理的な源泉である[45]．やがて《社会契約論》のなかで明確に表現されるとおり，国家の意義は人々に利益を便宜を授けることよりも，正義と義務を自覚させるところにある．国家や法律が人間を道徳的な存在たらしめる，と項目《政治経済》も強調する．

「人々を自由にするため服従させる，強制も相談もなく，成員の財産・労働・生命を国家のため使用する，彼ら自身の同意によって，その意志を拘束する，彼ら自身の拒絶にもかかわらず，ついには彼らを同意へと導く，彼らが止むをえず選んだ行為についても，それを処罰することができる，――これらの事柄は，いかなる魔術によって可能となったのであろうか．服従があって，命令がなく，奉仕があって，主君がなく，服従の状態とみなされながら，他人の自由を害う以外の自由は失っていない――これらの事柄がいかにして可能となったのであろうか．こうした奇蹟をもたらしたものは法である．法だけが人々に正義と自由を与えたのである．」[46]

ルソーの作品にあっても，十八世紀のほとんどの著作と同様に，社会と国家の相違，経済と政治の区別は明瞭でない．しかし，ディドロをはじめ，ダランベールやデュマルセも各人の幸福を増進するいわば外的な条件として，社会や政治を考えるのに比し，項目《政治経済》は祖国愛として国家を内面化することを力説する．こうして一般意思への服従，祖国への献身を訴えるルソーこそ，成員すべての生存と福祉を追求すべき国家に，専制と私的利益が横行することを，だれよりも憂慮したと感じられる．彼は言う．

「たとえば，成員に国家という機構との関係においてのみ自己の個体を考え，国家の部分としてのみ自己の存在を意識するよう早期から訓練するならば，彼らは自己と大きな全体とを同一とみなす方向へと進むであろう．すなわち，みずからを祖国の成員と自覚し，孤立した人間がみずからにしか抱きえない，熱烈な感情によって祖国を愛し，大きな目的に向かって，つねに魂を高め，かくして各人の性向を，あらゆる罪悪の源泉となる危険から，崇高な徳性へと変革するのである．」[47]

このような論理から項目《政治経済》は，国家による公教育の貫徹を要望する．公教育が私教育よりも優位にあることを認め，政府に公教育の重視を求める主張は，すでに考察したとおり，《コレージュ》や《教育》の特徴に属していた．それは現実の教育をまず宗教的な支配

から解き放つためであり，かつまた貧しい民衆にも等しく教育の機会を提供するためであった．しかしながら，ルソーが国家のもとでの青少年の育成を提唱するとき，そうした構想の根拠は教育の理念と目的それ自体のうちに存する．彼によれば，祖国への献身や一般意思への服従を培うことは，私的な意識と生活の濃厚な家庭ではきわめて困難だからである．つぎの一節は項目《政治経済》の公教育論として，もっとも有名な部分であろう．

「人間は生涯の最初の瞬間から，生きるに値することを学ばねばならない．そして，彼は生れながらに市民としての権利を享受しているのであるから，誕生の時点が義務を遂行する始まりとなるべきであろう．成人にとって法が存在するのと同様に，子どもにも法が存在し，他人に服従することを教える必要がある．各人の理性だけで，人間の義務を定めるべきではないから，子どもの教育は父親の知恵や偏見に委ねられてはならず，父親にとってよりも，国家にとって重要な事柄である．（中略）もしも公の権威が父親の代りとなり，この重要な任務を引き受け，子どもへの義務を果すとともに，子どもへの権利を保有しても，父親が不平不満を述べるのは当らない．なぜなら，そこでは名目が変るだけであって，父親の名で子どもに対し，個々に行使した権威を市民の名において共有し，血のつながりによる服従が，法の定めによる服従に変るだけである．したがって，政府の制定した法令と主権者の任命した行政者のもとにおける公教育は，人民的または合法的政府の基本的原理のひとつである．」[48]

とはいえ，ルソーは理想の国家と公教育が実現することに，どれほどの確信を有したであろうか．現実の国家に対するルソーの見方は，ダランベールやデュマルセに比し，はるかに懐疑的に感じられる．前者が家庭や教会への不信から，現存の政府に多くの期待を寄せたのに反し，後者は現実の国家と政治はすでに真価を喪失しているとみなす．確かに《政治経済》に含まれる公教育論は，古代の讃美と現代への不信を語って終結するのである．

「これまでに公教育を行った国民として，私は三つしか知らない．すなわち，クレータ人，スパルタ人，および古代のペルシャ人である．公教育はいずれにおいても大きな成功を収め，とくにスパルタ人とペルシャ人においては驚異的であった．地上に広大な国家がつぎつぎと出現し，立派に統治することが困難になると，かつてのごとき方法は放棄された．そして，読者の容易に推測できる他のさまざまな理由が，公教育の試みを近代の国民に許さないのである．」[49]

こうして私たちは，百科全書派が提唱した公教育とルソーが主張した公教育との間に，重大な相違が存することを認識する．そして，現実のなかに真の祖国を見出しえないとき，ルソーは国家それ自体の根本的な変革を志すか，現存の政治と絶縁した形で，新しい人間の育成を試みることとなろう．項目《政治経済》における公教育の強調が，やがて《エミール》における人間形成へと転回する理由を，筆者は理解できるように感ずるのである．

注

1) G. Snyders : La Pédagogie en France aux 17e et 18e Siècles, Paris, 1965, pp. 357—380.

2) R. Chartier, M.M. Compère, D. Julia : L'Education en France du 16e au 18 Siècles, Paris, 1976. p.p. 205—206.

3) 桑原武夫編：ルソー研究，岩波書店，1951年，331—332頁．

4) F. Buisson Nouveau Dictionnaire de Pédagogie, Paris, 1911. pp. 550—551.
コンペイレは下記の書物でもデュマルセをかなり詳しく論じている．
G. Compayré : Histoire critique des Doctrines de l'Education en France, Paris, 1898. Tome 2, p.p. 138—146.

5) Table des Matières du Dictionnaire des Sciences, des Arts et des Métiers, Paris, 1780. Tome 1, p. 560.

6) J. Proust : L'Encyclopédie, Paris, 1965. p.p. 57—58.

7) R. Grimsley : Jean d'Alembert, Oxford, 1963. p.p. 11—12.

8)《百科全書》に見出される若干の剽窃を辛辣に論評した《トレヴォー誌》は，ダランベールについて，つぎのように評価する．「《百科全書》の執筆者のなかにも，きわめて有能な文筆家がひとりはいて，彼は典拠を明示している．」「ダランベールが書いたこれらの項目は，みな重要であり，《百科全書》を名誉あらしめている．Mémoires pour l'Histoire des Sciences et Beaux-arts(Journal de Trévoux), Paris. Décembre 1751, p.p. 2610—2611, Janvier 1752, p.p. 171—172.

9) 小場瀬卓三：ディドロ——百科全書にかけた生涯，新日本出版社，1972年，76—82頁．あるいは，
Le Gras : Diderot et l'Encyclopédie, Paris, 1928. p. 39.

10) Proust : op. cit., p. 48. あるいは，
Grimsley : op. cit., p.p. 10—11.

11) Encyclopédie, ou Dictionaire raisonné des Sci-

ences, des Arts et des Métiers, Tome 3, Paris, 1753. p.p. 634—635.

12) Encyclopédie, Tome 1, Paris, 1751. p.p. xxxjv.

13) M. Condorcet : Eloge de M. D'Alembert. (Oeuvres, par O'Connor et Arago, Tome 3, Paris, 1847. p.p. 53—54)

14) Encyclopédie, Tome 3, p. 635.

15) F. Rabelais : Gargantua. (Oeuvres complètes, par Jourda, Tome 1, Paris, 1962. p.p. 59—62.)

16) Encyclopédie, Tome 3, p. 637.

17) 同じような表現は，すでにモンテーニュの《随想録》のなかに存在する．
M. Montaigne : Les Essais. (Oeuvres complètes, par Armaingaud, Tome 2, Paris, 1925. p. 77.)

18) Encyclopédie, Tome 3, p. 635.

19) Ibid., p.637.

20) Ibid., p. 637.

21) Grimsley : op. cit., p.p. 34—41.

22) Encyclopédie, Tome 6, p. 94.

23) 桑原武夫編《ルソー研究》は項目《教育》の執筆者を，ヴィリエとしているが（同書，331頁），これは誤りである．《教育》には執筆者記号として(F)が付せられているけれども，ヴェリエのそれは(f)である．なお，コンドルセが刊行に関与した《体系的百科全書》の項目《教育》にも《百科全書》と同一の論文が掲載されており，そこにはデュマルセの名が明示されている．
Encyclopédie méthodique, Grammaire et Littérature, Tome 1, Padoue, 1786. p.p. 693—700.

24) 寄稿者の範囲と年令を知るには，下記の書物が便利である．桑原武夫編：フランス百科全書の研究，岩波書店，1954年，27—36頁．
ただし，現在もっとも信頼しうるプルーストの百科全書協力者一覧には，フォントネルが含まれていない．
J. Proust : Diderot et l'Encyclopédie, Paris, 1967, p.p. 511—531.

25) Eloge de M. Du Marsais. (Encyclopédie, Tome 7, Paris, 1757. p.p. i—v.)

26) D. Diderot : Plan d'une Université ou d'une Education publique dans toutes les Sciences. (Oeuvres complètes, par Lewinter, Tome 11, Paris, 1970. p. 785.)

27) Eloge de M. Du Marsais. (Encyclopédie, Tome 7, p. xi)

28) S. Auroux : L'Encyclopédie "Grammaire" et "Langue" au 18e Siècle. Paris, 1973. 49—50.

29) E. Brekle : Remarques bibliographiques préliminaires. (C. Du Marsais : Oeuvres choisies, Stuttgart, 1970. p.p. ix-x.)

30) H. Dieckmamm : Le Philosophe—Texts and Interpretation, Saint Louis, 1948. p. vii.
たとえば，つぎの作品は，デュマルセを大きく取扱い，貴重な文献であるが，《哲学者》を彼の作品として評価する欠陥を含んでいる．
P. Damiron : Mémoires pour servir à l'Histoire de la Philosophie au 18e Siècle, Tome 3. Paris, 1864. p.p. 182—195.

31) Encyclopédie, Tome 5, Paris, 1755. p. 397.

32) Ibid., p. 397.

33) Buisson : op. cit., p. 551.

34) Encyclopédie, Tome 5, p. 402.

35) Ibid., p. 397.

36) 一例を挙げれば，《諸学教程》の下記の部分と，これを引用したデュマルセの叙述を比較されたい．
P. Buffier : Traité des premières Vérités (Cours des Sciences, Paris, 1732. p.p. 568—569.)

37) Encyclopédie, Tome 5, p. 400.

38) ルソーにおける公教育論の意義と構造を，綿密に究明したものとし，つぎの論文を挙げておく．
松島鈞：ルソーの公教育思想に関する一考察(1)—(3)，千葉大学教育学部研究紀要第八，九，十巻，1959—1961年．

39) Discours préliminaire (Encyclopédie, Tome 1, p. xliii.)

40) J.-J. Rousseau : Les Confessions. (Oeuvres complètes, par Gagnebin et Raymond, Tome 1, Paris, 1956. p.p. 347—348.)

41) R. Hubert : Rousseau et l'Encyclopédie, Paris, 1928. p.p. 21—23.

42) J.-J. Rousseau : Correspondance générale, par Dufour, Paris, 1924, Tome 2, p. 273.

43) Rousseau : Les Confessions. (Oeuvres cmplètes, Tome 1, p. 404.)

44) J. Spink : Les premières Expériences pédagogiques de Rousseau. (Annales de la Société J.-J. Rousseau, Tome 35, Genève, 1963. p.p. 93—95.)

45) R. Derathé : Jean-Jacques Rousseau et la Science politique de son Temps. Paris, 1974. p.p. 244—245.

46) Encyclopédie, Tome 5, Paris, 1755. p. 337.
なおこの項目は正確には《経済—道徳的あるいは政治的》(Economie ou Oeconomie, morale et politique) と記されている．1756年にこれが《政治経済論》(Discours sur l'Oeconomie politique) として，単独に出版された．

47) Ibid., p. 343.

48) Ibid., p. 343.

49) Ibid., p. 343.